photo_Seishi Shirakawa

左／《ショージエ》の棚の金具は古い業務用の棚がヒントに。中／《ショージエ》はフィンガージョイントを採用。右／テーブル《XX》の脚部は軍用の担架を流用。

ま

ずはグッドニュース。あのシグーの家具が、日本でも購入できることになった。しかも日本向けの新作《ショージエ》も発表。これは箱を組み合わせた構造の収納家具中心のコレクションである。シグーのユーゴ・アスは話す。

「パリ郊外で住宅のリノベーションを相談されたとき、その家の昔の住人だったおじいちゃんの大工道具や日用品が大量に遺されていた。家主が要らないと言うから、僕らが引き取ったんだ」

《ショージエ》は、この時代を経た宝物をひとつずつ収める棚として発想したという。同時に郵便局や工場の業務用の棚など、多様な家具や空間のイメージも取り入れた。多くのイメージを収集し分析することは、デザインの大きな方向性を決めるためにも、ディテールのヒントとしても役立つそうだ。この段階を経てから、自分たちの手を使ってものを作るのがシグーのスタンス。そんなプロセスは次ページで詳しく紹介する。

「建築やデザインだけでなくアート、映画、歴史や哲学などいろんなイメージを取り入れる。広い視野で価値観をミックスしたもの作りがしたいからだ。ミラノサローネやメゾン・エ・オブジェは商業的で、僕らには居心地が悪い」

ユーゴは2012年、〈21_21 DESIGN SIGHT〉で観た東北の伝統工芸展『デマヒマ展』に共感したという。最大限に時間と手間をかけたものの魅力があったからだ。

「僕らが最初に自分たちで作れたのは模型だった。やがて家具、インテリア、住宅のリノベーション、住宅、ショップへと規模が大きくなった。いずれ学校、ミュージアム、病院、高層ビルへと広がっていくかもしれない。いきなり高層ビルを設計する建築事務所に入るやり方もあるよね。でもすべて自分たちで経験していくほうが、選択肢が豊かになる」

彼らのデザインプロセスは、きっとこれからも変わらない。シグーー流の高層ビルが、いつの日か見られるかもしれない。

新作お披露目のため来日したユーゴ。「おじいちゃんの道具」も持参した。

経験が大事だから、時間をかけて作るんだ。

シボネで販売が始まり、日本でも人気急上昇の〈シグー〉。
このプロジェクトを仕切ってきたメンバーのひとり、
ユーゴ・アスが彼らのフィロソフィーを語る。

510

ソリッド感のあるスチールパイプとウッドやレザーを組み合わせたスタッキングチェア。1960〜90年代にフランスの学校で使われた椅子をリデザインした。同種の椅子を作り続けるフランス唯一の工場で製造する。44,100円〜。

BIX

シグーが最初の家具コレクションで発表したテーブル。コーティングしていない鉄板を折り曲げて天板とし、製材所で雨風にさらされたオーク材を脚部に使った。幅2m以上あり、素材感もサイズもダイナミック。472,500円。

XX

シグーと縁の深いパリの人気店〈メルシー〉のマーケティングディレクター、ジャン＝リュック・コロナの自宅のためにデザインしたローテーブルが原型。折り畳み式の脚部は1960年代の軍用の担架を使用している。294,000円。

PAL

天板に、フランスの果樹園で破棄される輸送用パレットの廃材を使用。わずかに風合いの異なる細い木材を組み合わせて、繊細さのある表情を生み出した。スチールでできた細めの脚部とのバランスもいい。682,500円。

Chosier TYPE 01-A

箱を積み上げて固定する《ショージエ》のベースであり、単体ではサイドボードになる。板の端を互い違いにカットしてつなぐフィンガージョイント、鉄のパーツ、ガラスのドアのレザーハンドルなど隅々にこだわりが。420,000円。

●問合せ／シボネ青山☎03・3475・8017。

photo_Shiro Muramatsu (p.62, p.64〜p.65), Kosuke Mae (p.63)
text_Takahiro Tsuchida (p.62〜p.63), Chiyo Sagae (p.64〜p.65)
editor_Akio Mitomi

インテリア界でいま注目の3組に、家具作りの秘密を聞きました。

全員が大工から建築までこなすシグー、デザインと品質のいいものを安価に提供するヘイ、異文化のミクスチャーを家具で表現するボクシャ。
彼らの知られざる素顔と、デザインの背景にある発想の秘密に迫ります。

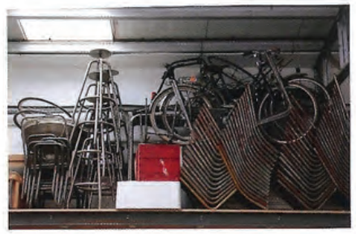
シグー 左上から時計回りに／エルワン・レベック、カミーユ・ベナール、アドリアン・アンファルヴァイ、ギュム・ロナール、アルフォンス・サルトゥー、ユーゴ・アスの6人がパリ・ラ・ヴィレット建築学校在学中の2003年に結成。アトリエの素材見本置き場にて。

素材見本置き場の木材サンプル。

結成当初、建築学校時代のアクティビティーは、木工。木材に対する彼らのセンシビリティーは近年さらに磨きがかかる。あらゆるニュアンスの木材を集める。

言葉では伝わらないニュアンスも。

ある一角には用途別や部品別ではなく、強いて言えば触感・形、風合い、特殊機能を持つなど、どこか気になる素材や部品を陳列。これが強力なイメージソース。



収集廃品を保管する新作業場。

拡張した新たな作業場の一角にも、結成当時からメンバーが収集し続ける古い椅子の骨組みや自転車、箱、金属板など、出番を待つ（?）アイデアソースを保存。

シグーの原点、新作業場の収納。

当初は資金もなく、倉庫用の金属アームのシステムや廃品の箱や板を利用して作った、再構築可能が自慢の収納だった。引っ越し後の新作業場でも見事再構築。

例えば閉鎖した工場や倉庫から拾ってきた箱を重ねたり、入れ子箱状の棚で小物を収納。シグーのアイデアソースだ！

金具など、皆が手に取り、触感を確かめられる逸品を取り出すことも多々。素材のみならず部品や収集古物が織りなす、この「素材見本置き場」に、シグーのデザインの鍵の1つがあると見た！

家具のデザインにおいても、この流れは同じだと彼らは言う。「作業場を、もう少し広い場所に移したんだよ」と言われ訪ねてみれば、まさしく以前「どこに引っ越しても、システムを解体し、再構築すれば捨てるものなく新しい空間に合わせて収納を再構築できる」と聞いた通り、新作業場は使い心地よく整えられていた。

「僕らは相変わらず拾ってきた棚や木箱で作った収納システムを採用してる」とユーゴが笑う。そのひとつひとつ、細部、組み立てが、今やシグーの作るスタイリッシュで懐かしく機能的な家具デザインに反映される。シグーのデザインの鍵の2つ目をここに再発見した思い。ディテールから発想し、ディテールで全体を伝え、ディテールを組み合わせて新たな発想をする。それがシグーのやり方だった。

インスパイアする小物。

右／アトリエ内「素材見本置き場」の横には、なんだかメンバーが気になる部品やカタチ、建築模型など、とりとめなきモノを収納する棚。下／中にはメンバーが拾ってきた古い電球スタンドもあれば、光の角度調整が可能なシグー自家制作の吊り型ランプもあり。

始まりはビジュアルイメージ。

プロジェクト着手は各人がイメージを持ち寄ることから。デザインに限らずアート、スポーツ、映画の一場面まで。触感を伝え、共有するコミュニケート手段。

cigüe

シグーの発想に迫るアトリエ潜入記。

プロジェクトの違いにかかわらず、シグーのデザインの源は表情豊かなディテールにあり！
そのディテールを決定づける、多種多様なマテリアルに囲まれた彼らのアトリエを訪問。

イザベル・マランのショップ素材見本。

現在、中国で進行中の店舗を手がける施工業者に、現地で調達する使用マテリアルのニュアンスを正確に伝えるため、こうした素材サンプルを必ず送るという。

パリの靴屋〈ゾエ・リ〉の店舗素材。

クライアントへの最終プレゼンでは空間を構成する素材を見せる。新旧の真鍮、タイル、大理石、半透明ビニールなど。施主の条件だったグレーの靴箱も一緒に。

テーブル《BIX》の構成素材。

鉄板、オーク材、ネジ、木材と鉄板の接続用自家製パーツが、シンプル＆インパクトある仕上がりをすでに感知させる、テーブル《BIX》（p.63）の全構成素材。

これまでは、リノベ住宅や店舗設計の施主の依頼と要望に合わせ、特定の場と人に必要な家具をデザインしてきたシグー。2013年秋、初めてシグーの単体デザイン家具《ショージエ》をリリースするにあたり、彼らは考えた。僕らの家具のアイデアソースはなんだろうかと。〈ショージエ〉のプレゼンに示されたイメージは、50〜60年代のアノニマスな木製書類棚や業務用のアルミ製の棚、パリの古い蝶番（ちょうつがい）専門店の商品棚からアイリーン・グレイ、シャルロット・ペリアンの収納家具まで多岐にわたる。その真意が知りたくて、パリ郊外の彼らのアトリエを訪れた。

「まずは、僕らの仕事の仕方を知ってほしい」と、ユーゴが案内してくれたのは、さまざまなビジュアルを並べた窓際。歴史的デザインもあれば、山岳用ピックも文章もある。分野にとらわれない彼らの自由な発想基盤が面白い。

「どのプロジェクトも、最初に皆が思うそれぞれの触感やアイデアなど、どんな形状でも直感的なソースを伝え合うことから始まる」

6人が集まりアイデアを練る最中に、誰かがアトリエの一角にある「素材見本置き場」から木片やネジ、電気技師のケーブル収集の